

## 熊本県平坦部における秋大豆不作の原因とその対策（第2報）

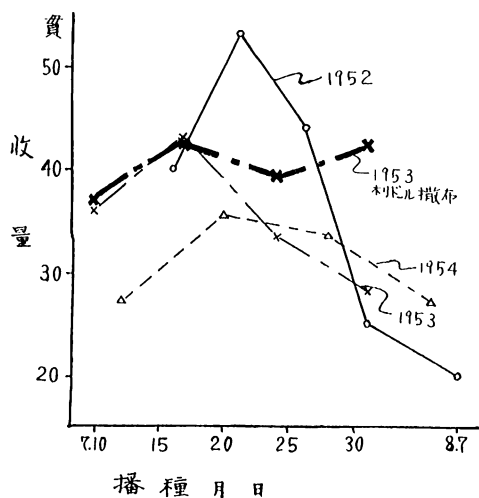
古谷 義人\*・久木井基二\*・加藤 誠\*

FURUTANI, Y., KUKII, M. &amp; KATO, H. Damages of Autumn-type Soybeans caused by Insects in Kumamoto Pref. and its Control (II)

前報に示したように、播種期のくりさげによつて害虫による被害を少くさせると、ある程度の収量をうるのではないかとの見とおしをえたので、実際に秋大豆を用いて播種期試験を行い、その実用性を検討することとした。

試験は1952～1954年の3カ年にわたつて行つたが、その結果を示せば第1図・第1表のとおりである。年次によりいくらかのずれは認められるが、おうむね7月20日前後に播種した場合に最も収量が高かつた。各年とも早播ほど生育はすぐれているが、害虫による被害率が多く、不稔も多いために、早播がかえつて収量が低いものと思われる。なおダイズクキモグリ

第1図 播種期と収量の関係



\*九州農業試験場

第1表 収穫物調査成績 (1953)

調査項目	播種月日	7.10	7.17	7.24	7.31
主 茎 長	cm	57.2	51.3	47.9	34.6
主 茎 節 数	数	15.8	14.7	13.9	12.5
分 枝 数	数	1.5	2.1	0.8	1.3
分 枝 長	cm	18.8	15.4	2.9	5.3
1 株 莢 数	数	35.5	38.4	26.9	17.5
〃 胚 子 数	数	55.3	82.0	56.2	38.1
〃 不稔 莢 率	%	18.3	11.7	9.7	2.9
〃 稔 実 粒 数	数	33.5	60.2	40.2	31.1
〃 不稔 実 粒 率	%	34.4	26.6	28.5	18.4
害 虫 被 害 粒 率	%	29.6	18.3	23.4	13.3
生 長 点 枯 死 率	%	0	8.2	23.8	14.8
節 間 萎 縮 個 体 率	%	6.3	15.8	46.8	57.0

バエによる災害の程度については明らかでないが、7月下旬ないし、8月上旬に播種の場合には生長点が枯死したり、節間が萎縮して生育を阻害される割合が高くなり、晩播による減収度を一層助長しているように考えられる。それでこころみに1953年度にホリドールを開花まで1週おきに撒布する区を設けてクキモグリバエによる被害を除いた結果、晩播による減収度を軽減できること、つまりクキモグリバエ防除による効果は晩播の場合に大きいことが示された。なおこの点についての詳細は次報以下にふれる予定である。

以上のべたように、本試験の結果、従来の慣行播種期では収穫皆無とされた熊本県平坦部知地帯でも、播種期を7月中・下旬にくり下げることによつて、8斗～1.2石程度の収量をあげうる見とおしをうる事ができた。しかしながら害虫の発生期はところによつてかなりちがいがあつたために、この播種適期も地区によつて若干の差異を示すように観察されているので、この点は現地にもちこむ場合留意しておかなければならない。